

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

# 釧路湿原サイト

－北海道阿寒郡－

釧路湿原は釧路平野に位置する日本最大（18,290ha）の湿地です。海面が高かった約6,500年前に深い内湾となっていたところが現在の釧路湿原になったとされています。特別天然記念物であるタンチョウと準絶滅危惧種であるキタサンショウウオの我が国における主要な生息地であり、湿原内を流れる釧路川やコッタロ川などには国内最大の淡水魚イトウが生息します。湿原の大部分はヨシやスゲ類を主体とする低層湿原やハンノキ林ですが、温根内赤沼周辺及びキラコタン岬の南方にはミズゴケを主体とする高層湿原が発達しています。



調査ラインのハンノキ林区の景観。立ち枯れが目立ち、ハンノキ林は消失しつつある

## 2023年度の調査結果概要

2009年度の調査開始から14年目、8回目となる植生調査は、2023年9月5日から6日にかけて3名で実施しました。1日目は雨上がりを待って出発し、2日目は薄曇りで、おおむね良好な条件で調査を行うことができました。

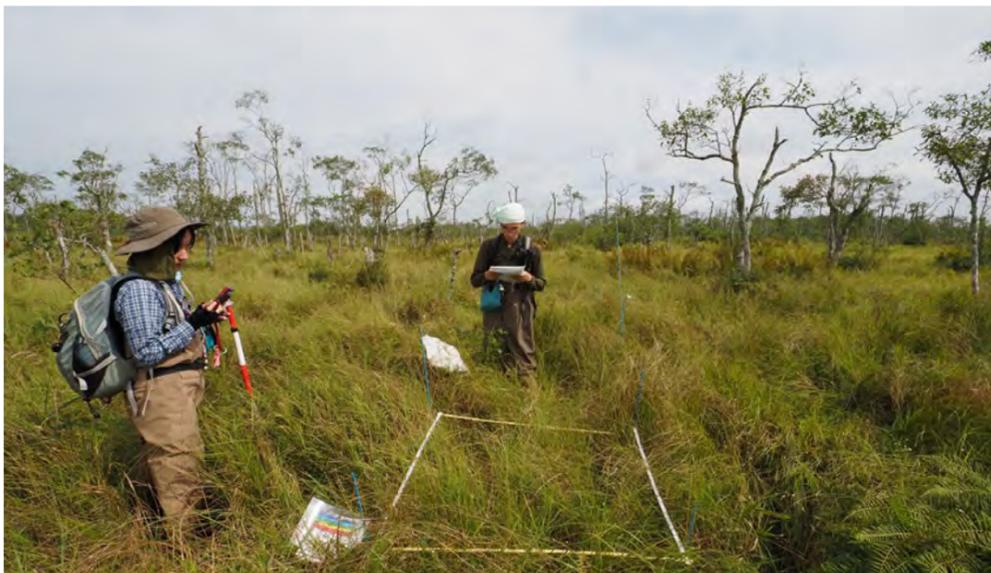
植生調査では前回との大きな違いはみられませんでした。ヌマカタウロコゴケという高層湿原に見られる苔類を記録できました。調査地周辺ではエゾシカの攪乱による植生の変化が進行しているようにみえました。前回の調査で確認されたヨシの減少は継続中で、高層湿原部ではチャミズゴケの小丘（ブルト）の損壊も前回と同様に認められました。ハンノキ林では立ち枯れが多くみられ、林冠の連続性が失われて、林とは言えない状態になっていました。長期的にはガンコウランやサワギキョウが減少する一方で、ナガバノウナギツカミやチシマガリヤスなどいくつかの種は増加している傾向がみられました。外来種の侵入については、調査ライン周辺では今のところ認められませんでした。

### 【調査者・調査協力者】

佐藤雅俊（帯広畜産大学）、加藤ゆき恵（釧路市立博物館）、内田暁友（蘚苔類研究者）



増加傾向にあるナガバノウナギツカミ



調査区の四隅に杭を打ち、区内に出現する植物の被度を記録する様子



チャミズゴケの中のヌマカタウロコゴケ（中央の黄緑）



ヤマドリゼンマイにみられたエゾシカの食痕

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

# 雨竜沼湿原サイト

—北海道雨竜郡—

雨竜沼湿原は北海道北西部の増毛山地にある湿原で、東西約2km・南北約750mという北海道ではもっとも規模の大きな山地湿原です。この湿原は周囲を南暑寒岳・恵岱岳・群馬岳の3山に囲まれた標高850mの凹地に広がっており、今からおよそ1万年前に成立したと考えられています。湿原内には多数の池塘が点在し、池塘の周辺には部分的に高層湿原植生がみられますが、湿原の大部分はヌマガヤを主体とする中間湿原植生です。これにシラネニンジンやキダチミズゴケといった多雪地・雪田の構成種が加わっています。



池塘を含む典型的な山地湿原の景観がみられる雨竜沼湿原

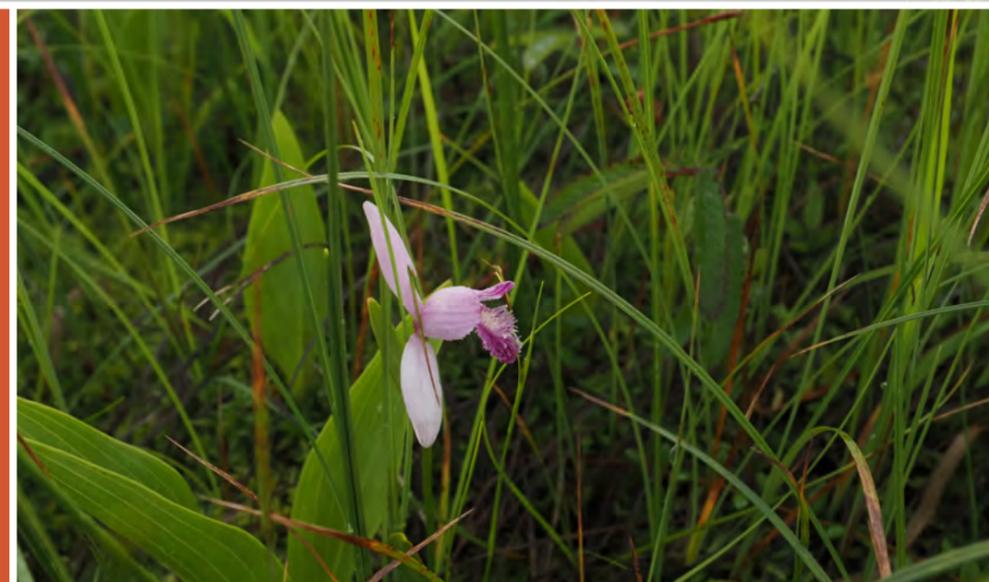
## 2023年度の調査結果概要

雨竜沼湿原サイトは2019年度に新設されたサイトで、2023年度の植生調査は4年目、2回目となります。調査1日目は雨天でしたが、2日目は晴天となり所定の調査を行うことができました。調査ライン上には中間湿原の代表種であるヌマガヤを主体とする群落や、ミズゴケ類を主体とする群落、浅い池塘の群落などが散在します。

方形区の植生調査では、前回との大きな違いはみられませんでした。雨竜沼湿原は多雪の影響下であり植生は安定していると考えられます。唯一の変化としては、浅い池塘に設置した方形区1区で、ミカヅキグサの侵入がみられました。このまま被度を増加させて優占種が交替するのか、変化をみていく必要があります。また、動物の採食を受けたタチギボウシの花茎もみられました。

### 【調査者・調査協力者】

佐藤雅俊（帯広畜産大学環境農学研究部門）、首藤光太郎（北海道大学総合博物館）、内田暁友（蘚苔類研究者）、山崎真実（札幌市博物館活動センター）、上野綾子（日本国際湿地保全連合）



トキシウの花



調査区の四隅に杭を打ち、区内に出現する植物の被度を記録する様子



雪田要素のチングルマとキダチミズゴケ



採食を受けたタチギボウシの花茎

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

# 尾瀬ヶ原湿原サイト

—群馬県利根郡—

尾瀬ヶ原湿原は、群馬県、新潟県、福島県の3県にまたがる面積約760haの本州最大の山地湿原群です。周囲を燧ヶ岳、至仏山など2,000m級の山々に囲まれた盆地の標高1,400m付近に位置し、1年の半分以上が雪に覆われる豪雪地帯にあります。湿原内ではゼンテイカやミズバショウなどの多様な湿原植物、流路に沿ってハルニレやサワグルミ、周縁ではダケカンバなどの高木が見られます。本サイトでは、湿原内の中田代地域（群馬県）に調査ラインを設定しています。



尾瀬ヶ原より至仏山を望む。

## 2023年度の調査結果概要

植生調査は8月11日、12日に実施しました。尾瀬ヶ原湿原サイトでは、これまで2010、2013、2016、2019年度に植生調査を実施しており、今回は5回目となります。

調査ラインに沿って設置している23個の方形区において植生調査を実施した結果、各方形区で確認された種数（未同定種を含む）は、草本層で8～22種、コケ層で0～4種でした。草本層とコケ層を合計すると、8～25種が各方形区で確認されました。全体では、草本層で63種、コケ層で16種となりました。植生の相観に大きな変化はなかったものの、ヒオウギアヤメ、ゼンテイカ、ミツガシワにはニホンジカの食痕が見られ、周辺にも踏み跡が散見されました。また、下ノ大堀川に近い方形区付近では、ヨシが湿原中心方向に向かって分布を広げている可能性が示唆されました。

2023年の冬は雪が少なく雪解けが早かったことから、植物の成長が早い傾向にありました。しかし、6月20日の遅霜によりヤマドリゼンマイなど、一部の植物は霜害の影響を受けており、これが被度の低下につながった方形区もみられました。

### 【調査者・調査協力者】

竹原明秀（岩手大学）、野原精一（国立環境研究所）、黒沢秀基（群馬県）、青木美鈴（日本国際湿地保全連合）



夏の湿原を彩るキンコウカ。



調査の様子。  
方形区に出現する種やその被度などを記録します。



ヒオウギアヤメに残された食痕。  
ニホンジカの食痕はゼンテイカやミツガシワにも見られました。



ヤマドリゼンマイの群落。  
遅霜の霜害で葉が茶色く変色した個体も見られました。